

## 新約聖書における使徒的解釈学 ——現代福音主義への示唆——

山崎ランサム和彦

### はじめに

本年(2014年)11月に開催される日本福音主義神学会全国研究会議の主題は「福音主義神学、その行くべき方向—聖書信仰と福音主義神学の未来—」となっている。このような主題が設定された背景として、準備委員会による趣旨説明では、「今日、その神学的多様性からはもともと当然のことなのではあるが、特に、この広範な広がりを持つ福音派の運動の、軸となる聖書信仰についての揺れから、福音派の Identity が問われることが多く、福音主義神学も例外ではなくなっている。」と述べられている<sup>1</sup>。

「福音主義 evangelicalism」という用語は非常に多様な用法のある、あいまいな語であるが、今日いわゆる日本の「福音派」に属するキリスト者が「福音主義」という言葉を使う時、それが聖書の権威とキリスト教信仰における中心的重要性を強調する要素を含んでいることは疑いがない。したがって、聖書のメッセージ(そこに含まれている真理)とその正しい解釈が福音主義神学の基盤となっていることは、ほぼすべての福音主義キリスト者が同意することができる。

しかし、果たしてその基盤である「聖書」について、我々は正確な理解を持っているのだろうか。聖書がどのような書物であり、どのように解釈すべきで

<sup>1</sup> 日本福音主義神学会 2014 年度全国神学研究会議案内状より。

あるのかについての我々の理解自体が正確なものでなければ、その基盤の上に存在している釈義や適用のプロセスをいくら修正してみても、根本的な問題解決には至らないのではないだろうか。福音主義神学の揺らぎとはまさしく、その根底にある聖書観の揺らぎに他ならないのである。聖書が「靈感された」「誤りなき」「神のことば」であるというのはどういう意味か。聖書はどのような性質を持った書なのか。あるいは、聖書はどのように「働く」のか。我々は今一度これらの問題について整理して考える必要があると思われる。

とはいえ、そのような課題は非常に大きな広がりを持っており、この小論で論じ尽くすことは到底不可能である。本論文では、福音主義の釈義の方法論について、ごく限定的な議論を進めていきたい。以下の論考では、福音主義聖書学で広く採用されている「歴史的・文法的釈義」と呼ばれる方法論を吟味し、それを新約聖書自体に含まれている釈義方法と比較検討し、今日の福音主義的釈義に対する意義について考えてみたい。

#### 歴史的・文法的方法

福音派諸教会は大体において共通した釈義の方法論をもっている。それは「歴史的・文法的方法」と言うものである<sup>2</sup>。これは、聖書テキストの原文（ギリシア語・ヘブル語・アラム語）における分析とそれらのテキストが書かれた当時の文化的背景を考慮して、聖書記者がオリジナルの読者に伝達しようと意図した意味を読み取ろうとすることである<sup>3</sup>。その前提には、「聖書テキストには著者が意図した唯一の意味が内在している」という聖書観がある<sup>4</sup>。それに基づい

<sup>2</sup> 人によって呼称はまちまちで、「文法的・歴史的方法」と呼ばれることもある。この釈義方法および呼称の起源は、18世紀末から19世紀初頭にかけて書かれた Karl A. G. Keil の著作に遡るとされる。Walter C. Kaiser, *Toward an Exegetical Theology: Biblical Exegesis for Preaching and Teaching* (Grand Rapids: Baker, 1998), p.87.

<sup>3</sup> Kaiser (ibid.) によると、「文法的・歴史的方法の目的は、文法の法則と歴史の事実によって意味を確定することである。」ここで Kaiser は「文法的 grammatical」というのは、狭い意味での単語の配列や文の構成などについてのみ言われているのではなく、より広く「文学的 literal」と同義であると説明している。

<sup>4</sup> Kaiser (ibid., 88) はこの点を非常に強調している。

て、釈義 (exegesis) の任務はその意味をできるだけ正確に取り出すことであるというのである。もちろん、福音派の聖書解釈者たちは、聖書テキストの意味は一意的に定まるとしても、それは複数の適用が可能であることを認める。しかし、聖書著者が本来意図した意味は一つであり、それ以外の意味をテキストに読み込む行為 (eisegesis) は非難される。その一例として、恣意的なアレゴリーの解釈を挙げることができよう<sup>5</sup>。

20世紀になって、このような「著者によって意図された唯一の意味」を前提する解釈学的立場に様々な異議が唱えられ、テキストは作者から独立に意味を持つと主張する「新批評」や、読者が自由にテキストに意味を読み込むことを推奨する「読み手応答批評」などの試みがなされてきた。これらの動きに対する福音主義陣営からの代表的応答として、Kevin Vanhoozer の研究を挙げることができよう<sup>6</sup>。Vanhoozer は言語行為論を応用して、聖書を神からのコミュニケーション行為ととらえた。現代の様々な解釈学的展開を意識して、よりニュアンスに富んだものになったとはいえ、全体としては、「著者によって意図された唯一の意味」という伝統的な釈義的前提は保持されていると言える<sup>7</sup>。

歴史的・文法的方法は聖書解釈において大いに有益であることは疑いない。著者の意図した意味に注意を集中することによって恣意的な読み込みを避け、また執筆当時の歴史的・文化的コンテキストを尊重することによって、解釈者の歴史的・文化的コンテキストから来るところのバイアスのある程度排除することができる（完全に排除することは不可能であるが）。しかし、歴史的・文法的方法が唯一の正しい聖書解釈法であるかどうかは、検討の余地があると思われる。

<sup>5</sup> たとえば Fee と Stuart は、アウグスティヌスによる良きサマリヤ人のたとえのアレゴリーの解釈を反面教師として挙げている。Gordon D. Fee and Douglas Stuart, *How to Read the Bible for All Its Worth* (4th ed.; Grand Rapids: Zondervan, 2014), p.155.

<sup>6</sup> Kevin J. Vanhoozer, *Is There a Meaning in This Text?: The Bible, the Reader, and the Morality of Literary Knowledge* (Grand Rapids: Zondervan, 1998).

<sup>7</sup> Jeannine K. Brown, *Scripture as Communication: Introducing Biblical Hermeneutics* (Grand Rapids: Baker, 2007), pp.114-119 等を参照。

### テキストの「意味」と間テキスト性

歴史的・文法的方法は所与の聖書テキストが書かれた当時の歴史的コンテキストにおいて、著者がオリジナルの読者に対して意図した唯一の意味があることを前提として行われる。聖書が「原典において」誤りなき神のことばであるとは、オリジナルの唯一の意味が写本や翻訳によって変わってくることから、聖書の真理性を護ろうとして出てきた考えである。したがって、厳密な歴史的・文法的釈義は原語（ギリシア語・ヘブル語・アラム語）においてなされなければならないとされる。翻訳や後代の写本は厳密な意味で靈感されているとはみなされない<sup>8</sup>。

さらに、歴史的・文法的釈義は書かれた聖書テキストのオリジナルの歴史的・文化的コンテキストにおける、オリジナルの読者に対する意味を確定しようとするものであるから、より早い時期に書かれたテキストの解釈は、それより後に起こった出来事や書かれたテキストの内容から影響を受けることはないと言われ、これに逆行する解釈はアナクロニズムとして排除される<sup>9</sup>。つまり、ここでは先行テキストと後続テキストとの影響関係は一方向的であり、前者の意味は後者の意味に影響を与えるが、その逆はないということになる。

20世紀後半になり、ポストモダン哲学の興隆によって、「間テキスト性 intertextuality」という概念が注目を浴びるようになった。この概念によると、テキストはそれ自体で固定された意味を持つのではなく、他のあらゆるテキストとの関係においてのみ意味を持つという。そして、間テキスト性においては、先行テキストが後続テキストの意味に影響を与えるだけでなく、その逆も可能なのである<sup>10</sup>。

間テキスト性の概念は聖書解釈にも応用されるようになった。しかし、多くの解釈者は間テキスト性を先行テキスト（たとえば旧約聖句）から後続テキス

<sup>8</sup> J. I. Packer, "Inspiration," in *New Bible Dictionary* (ed. D. R. W. Wood et al.; 3rd ed.; Downers Grove: InterVarsity, 1996), p.509.

<sup>9</sup> たとえばバーナード・ラム『聖書解釈学概論』（村瀬俊夫訳、東京：聖書図書刊行会、1963年）、171-73頁。語義的研究におけるアナクロニズムについては、D. A. Carson, *Exegetical Fallacies* (2d ed.; Grand Rapids: Baker, 1996), pp.33-35を参照。

<sup>10</sup> Julia Kristeva, *Revolution in Poetic Language* (trans. Margaret Waller; New York: Columbia University Press, 1984), p.60.

ト（その聖句の新約聖書における引用）への一方向の影響のみに限定しようとする。つまり、先行テキストは後続テキストによって依存され、変形されもするが、依然として権威をもって語り続けるというのである<sup>11</sup>。聖書を権威ある神のことばと考える福音主義の立場からすれば、客観的なテキストの意味そのものを否定する極端なポストモダンの立場は受け入れることはできない。その一方で、間テキスト性の概念は、先行テキストから後続テキストへの単純な一方向の影響関係のみにとどまらない、ニュアンスに富んだテキスト間の関係を理解する手掛かりを与えてくれる。後続テキストは先行テキストをただ単純に繰り返すだけではなく、それとの対話を行い、特定の修辭的目的のために用いる<sup>12</sup>。場合によっては、後続テキストは先行テキストの理解に新しい光を投げかけることもある<sup>13</sup>。先行テキストと後続テキストの緊張感に満ちた相互作用によって、それぞれのテキストの意味が新しいレベルに引き上げられるのである<sup>14</sup>。そうであるなら、歴史的・文法的釈義による先行テキストの解釈は、議論の出発点にしか過ぎない。以下では、新約聖書における旧約聖書の使用に焦点をあて、歴史的・文法的方法の限界について見ていくことにしたい。

### 新約聖書における旧約聖書の使用

釈義の方法論としての歴史的・文法的方法の妥当性を測る一つの方法は、それを聖書自体に記録されている聖書解釈の実例と比較することである。新約聖書の中にはおびただしい数の旧約聖書への言及がある。それははっきりとした

<sup>11</sup> Richard B. Hays, *Echoes of Scripture in the Letters of Paul* (New Haven: Yale University Press, 1993), p.14.

<sup>12</sup> Patricia K. Tull, "Rhetorical Criticism and Intertextuality," in *To Each Its Own Meaning: An Introduction to Biblical Criticisms and Their Application* (ed. Stephen R. Haynes and Steven L. McKenzie; rev. and expanded ed.; Louisville: Westminster John Knox, 1999), p.169.

<sup>13</sup> I. Howard Marshall, "Acts," in *Commentary on the New Testament Use of the Old Testament* (ed. G. K. Beale and D. A. Carson; Grand Rapids: Baker, 2007), p.526.

<sup>14</sup> Robert L. Brawley, *Text to Text Pours Forth Speech: Voices of Scripture in Luke-Acts* (Bloomington: Indiana University Press, 1995), p.7.

引用の形をとることもあれば（たとえばルカ 3 章 4 節「預言者イザヤのことばの書に書いてあるとおり」やマタイ 4 章 4 節「～と書いてある」）、旧約聖句の引用であることを明示しない引喩の形を取ることもあり、さらに微細な「こだま echo」の形を取ることもある<sup>15</sup>。ここでは明示的な引用に限って話を進めるが、歴史的・文法的方法が唯一の正しい「聖書的」解釈法であると仮定すると、新約記者たち（あるいは新約のナラティブの中で旧約聖書を引用しているイエスおよびその弟子たち）が旧約聖書を引用する時にも、同じ方法を用いたと考えるのが自然である。つまり、新約記者たちは旧約聖書の文学的・歴史的コンテキストにおける、旧約記者によって意図された意味を正確に把握し、それに基づいた引用を行っているはずだ、ということになる。ところが実際には、新約記者たちの旧約釈義は、そのような期待とは大きく外れているように思える場合がある。このような現象をどう説明するべきか、福音派の聖書学者の間でも意見が分かれている<sup>16</sup>。

#### 引用文の形式

この問題の複雑さを表す一例として、引用文の形式について考えてみたい。旧約聖書はヘブル語（一部アラム語）で書かれ、新約聖書はギリシア語で書かれているため、後者における前者の引用文も当然原文のヘブル語そのままではなく、ギリシア語の形で書かれている。それらの多くは七十人訳旧約聖書から引用されたものと考えられるが、時としてヘブル語のマソラ本文により近いギリシア語訳となっていることもあり、さらには、七十人訳ともマソラ本文とも異なるギリシア語が用いられていることもある。このような引用テキストの多様性は、さまざまな問題を孕んでいる。

たとえば、マタイ 21 章 16 節後半にはこう書かれている。「イエスは言われた。『聞いています。「あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された」とあるのを、あなたがたは読まなかったのですか。』」ここでイエスは詩篇 8 篇 2

<sup>15</sup> Hays, *Echoes* 参照。

<sup>16</sup> 福音主義聖書学における意見の多様性については、Kenneth Berding and Jonathan Lunde, eds., *Three Views on the New Testament Use of the Old Testament* (Grand Rapids: Zondervan, 2009)を参照。

節（マソラ本文および七十人訳では 3 節）を引用しているが、引用元の表現はこうなっている。「あなたは幼子と乳飲み子たちの口によって、力を打ち建てられました。」マタイの引用文では「賛美 αἶνον」という言葉が用いられているが、これはマソラ本文の「力 כֹּחַ」とは異なっている。しかし、この引用は「賛美 αἶνον」の語を含め、七十人訳と全く同じ表現になっているのである。

このように、新約聖書における旧約聖句の引用が、マソラ本文ではなく七十人訳と一致する場合、引用元の「意図された意味」はどちらにあると考えるべきだろうか。詩篇 8 篇が「靈感された誤りなき神のことばである」というのは、ヘブル語原文のみに当てはまるのか、それとも、我々は灵感の範囲を七十人訳にまで拡張すべきだろうか。もしそれが許されるとしたら、ヘブル語テキストとギリシア語テキストはどちらも「正しい」ということになるのだろうか。これは聖書の灵感の概念を考える時に大きな問題となる。灵感の議論で必ずと言って良いほど引用される 2 テモテ 3 章 16 節でパウロがテモテに、「聖書はすべて、神の灵感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」と書き送った時、彼が念頭に置いていた「聖書 γραφή」はほぼ間違いなく、ヘブル語原典ではなくギリシア語の七十人訳であったと思われる<sup>17</sup>。パウロは旧約聖書のヘブル語原典は灵感されているけれども、ギリシア語訳はそうではないと考えていたとは思えないし、それはまた、彼と他の新約記者たちの旧約テキストに対する態度とも合致しているように思われる。

新約聖書における引用文の表現がマソラ本文とも七十人訳とも異なっている例として、エペソ 4 章 8 節における詩篇 68 篇 18 節（マソラ本文と七十人訳では 19 節）の引用がある。最も重要な違いは、エペソ書で「人々に賜物を分け与えられた ἔδωκεν」となっている所が、マソラ本文でも七十人訳でも「人々から、みつぎを受けられました ( ἔλαβες )」となっており、授受の関係が逆転している点である。ここでパウロは自分の引用目的のために旧約テキストに手を加えているのだろうか。ある人々は、パウロは今では失われた詩篇のテキストを使っていたと主張する。これは恣意的に旧約テキストに修正を加えたという

<sup>17</sup> Luke Timothy Johnson, *The First and Second Letters to Timothy* (AYB 35A; New Haven: Yale University Press, 2001), p.423.